

# 水道の将来を 考える



静岡県で、いつか起こるとされる大地震。今回は、南海トラフ巨大地震被害想定と危機管理体制について、水道課・山口裕通主任技師に話を聞きました。

## 地震による水道への被害

——地震の際、水道施設の被害はどれくらいですか。

静岡県第4次地震被害想定では、南海トラフ巨大地震が起きたとき、水道管が約500カ所で被害を受け、震災直後は97%、また、震災7日後でも52%が断水したままの状態と予想されています。

——三島市では、どのような準備をしていますか。

毎年7kmを目標に老朽管を耐震管に換える工事を進めるとともに、可能な限りの飲料水確保と一刻も早い平常給水へ回復するため「水道危機管理マニュアル」

ル」に基づき迅速に対応します。発災から1カ月後までに震災前の給水量に戻すことを目標に、施設や管路の復旧工事と断水期間中の応急給水を実施します。

——災害時の水の確保のため、どのような対策をしていますか。

管路漏水により配水池（タンク）の貯留水が減ることがないように、浄水場や主要な配水場へ、地震の揺れや漏水を感知して供給を一時的に遮断する緊急遮断弁を設置しています。この遮断弁により最大、伊豆島田浄水場で約4000m<sup>3</sup>、配水場では約2万6000m<sup>3</sup>合計約3万m<sup>3</sup>が確保されます。これは500mlのペットボトルに換算すると、約6000万本相当です。

——その水が断水した区域に供給されるんですね。

はい。指定避難所や医療機関などで使われます。また遮断弁が設置されている配水場には市が応急給水栓を設置するので、配水場の近隣にお住まいの場合は、直接給水を受けられます。

## 災害時の協体制

——大きな災害が起きたときは、三島市だけで対応できないこともありますよね。



水道課・山口裕通主任技師▲

はい。その場合は、災害協定を締結している三島市指定上下水道工事店協同組合、東部4市2町（沼津市、三島市、御殿場市、裾野市、長泉町、小山町）、日本水道協会、委託業者のCDC情報システム(株)に応援を要請します。東日本大震災や熊本地震では、日本水道協会の要請で全国の自治体から給水車や職員が派遣され、給水活動や復旧作業などを行いました。三島市も、東日本大震災や阪神淡路大震災では応援に行きました。

——訓練は行っていますか。

総合防災訓練のときに、指定工事店協同組合、委託業者と合同で被災訓練をしています。また、給水訓練は、平成26年度から、主要な配水場で実施し、平成27年度からは県企業局とも行なっています。

災害に備え、老朽管の更新や施設の耐震化を進め、発災時の断水を1日でも早く復旧できるように、対策を講じています。

## 水道事業審議会から、料金改定の答申を受けました

平成28年12月21日(水)、水道事業審議会より答申書が提出されました。

市の水道事業は、高度成長期に建設した施設や管の耐震化、老朽管への対応などさまざまな問題を抱えており、水道料金の改定について市長が諮問を行っていました。6回にわたる審議を行い、今回34・28%の料金改定やより一層の経営努力を求める答申を受けました。

今後は、市議会2月定例会に三島市水道事業給水条例などの条例改正案を提出し、審議が行われます。



▲稲田会長から答申書を受け取る豊岡市長

次回は、経営改善に向けた取り組みについて、広報みしま3月1日号に掲載します。

水道課 (☎ 983・2659)

# 歴史の小箱

No.345

源兵衛川と三四呂人形

水辺興談

三島の水を象徴する源兵衛川。遊歩道を散策すると、カワセミヤトンボ、ホタルなど、四季の変化に出会うことができます。夏には、子どもたちが川の中に入り、サワガニや小魚などとたわむれています。

源兵衛川は60年ほど前まで、楽寿園小浜池を水源とし、大量の湧水がとうとうと流れていました。川辺で洗濯する女性も多く、洗濯物を離すと、あつという間に流されてしまうほど早かったそうです。

江戸時代から、東海道に面した各家はこの水の恵みを生かし、裏に水路を引いていました。水路の上に台所を作り、洗い物をし、細かいごみを流し、夏はスイカや残りご飯を入れたブリキ製のフネを浮かべ、冷蔵庫代わりにしていました。

写真の子どもは、人形作家野口三四郎の甥たちです。写真家でもあった三四郎は大中島(現

在の本町)出身で、源兵衛川から上がってきた甥たちの楽しい時間を撮影しています。昭和初期の写真です。

その姿は昭和11年(一九三六)三四郎の作品「水辺興談」(張子)として結実し、第1回人形芸術院賞を受賞しました。

これは日本で初めて創作人形に与えられた大きな賞で、翌年から、日展人形部門となりました。この賞から、鹿児島寿蔵、堀柳女など後に人間国宝となる人形作家を生み出しています。その中で、最も将来を期待されていた三四郎は、翌年35歳の若さで亡くなってしまいました。

彼の名前からとった三四呂人形は、主に張子の技法を駆使し、子どもの世界を生き生きと愛らしく表現しています。今でも評価が高く、日本人の心の琴線に触れる素朴な人形は、三島の風土なくしては生まれることのない芸術作品です。

源兵衛川は、昭和30年代に周



▲三四郎の甥たち



▲「水辺興談」

辺の開発や工業化などにより湧水量が減ったため、流量が激減し、汚れてしまった時期もありました。しかし、長年にわたる多くの市民や団体の努力と、「街中がせせらぎ事業」などの協働事業によって、美しい流れを取り戻しました。

野口三四郎が亡くなった後、三四呂人形の製法は絶え、戦後にお土産として人気だった複製品も、やがて姿を消していきました。しかし昨年、三島商工会議所がお土産として三四呂人形の複製の開発に成功し、再び三四呂人形がよみがえろうとしています。

郷土資料館では、2月4日(土)

5月28日(日)企画展「三四呂人形―これまでと、これから―」で、「水辺興談」をはじめ、多くの三四呂人形、三島商工会議所での開発の様子を展示します。

ぼくのわたしの  
おじいちゃんおばあちゃん



石井和子(74歳・南木町)

土屋萌衣(南小6年)

私のおばあちゃんは物知りでいろいろなことを教えてくれたり、体験させてくれます。特に、歴史や歌舞伎に詳しくて、寺院や歌舞伎に連れて行ってもらったこともあります。また、とても面倒見が良いので私と妹だけではなく、私たちの友達のことにも本当にかわいがってくれてとても嬉しいです。

いつもユーモアがあって、楽しいおばあちゃんが大好きです。

これからも笑顔あふれる元気なおばあちゃんいてください。

※それぞれのお名前は直筆です。